

京都ホテル一階のティールーム。祇園祭のお囃子が聞こえていた。私の前に座っていたのは、山梨県商工労働観光部長の篠原 洋さんと担当の清水康邦さん。「知事の肝いりで、次代を担う青年教育の場として、『夢甲斐塾』を立ち上げます。その構想はマスコミに発表し、塾生は決まり、講師陣も決まっていますですが、塾長が決まりません。その塾長にご就任いただくお願いに参りました」と篠原部長が話を切り出された。

思わず、「山梨?」と聞きなおした。山梨との縁と言えば、三十六歳から三年半担当した電子レンジ販売の担当地域だったことだ。しばしば山梨に足を運んだものの、電子レンジ販売が目的だから、山梨については何も知らないにも等しい。一步後ろに下がりそうになった時、「塾長が決まれば、塾は始められます」と、篠原さんは身を乗り出された。

それが、『夢甲斐塾』との縁の始まりだった。担当の清水康邦氏は、後に塾生として加わる本気さで、塾長に就任した私を支えてくれた。

当時の県知事だった天野 建さんは、一言、「山梨県人の県民性として、『出る杭を打つ』習性があると言われます。しかしそれではこれからの時代、取り残されるばかりです。各界で『出る杭』を育てたいのです」と思いを

語られた。私はその一言に共鳴・共感して、お引き受けした。

取り組み始めると夢中になるのは、私の昔からの習性だ。山梨は、私の住む大阪からは、どのコースをたどっても、およそ六時間、一番時間の掛かる地の一つだ。それでも、私は嬉々として山梨に通った。当時は県の主宰する事業であったから、経営や実務の苦労は何もなかった。

無我夢中の三年が経過した。ある日、新しく就任した商工労働部長に県庁に呼ばれた。「知事が代わりました。新知事は観光に力を入れる方針です。夢甲斐塾は所期の目的を達成しましたので、今年度をもって事業を打ち切ることにしました。ご苦勞様でした」と頭を下げられた。

すっかり『夢甲斐塾』に本気になっていた私は、「ちょっと待ってください」と言わなかった。即座に、「分かりました。これからは自分でやります」と言った。一人でやっていける見通しがあったからではない。「出る杭」がそんなに簡単に育つはずがないとの信念があったからだ。

私があまりにもあっさり「分かりました」と言ったものだから、商工労働部長が、「事業を打ち切るとお伝えしてこんなにあっさり了解された人は珍しい。大抵は、あの手この手で継続を懇願されます」と驚いた。「出る杭」の第一条件は、まず自立だと私は信じていた。

「ここから先は自分達でやります」と大見えを切った。山梨県の商工労働部の責任者は、「県が打ち切ることを決めた事業を引き継いで自らやるケースはきわめてまれです。応援します」と申し出ていただいた。

県の補助金を当てにした「出る杭」など、決して本物ではない。「自らの足で立ち、自らの努力で、出る杭」になってこそ、本物」であると、私は、基本の指針を心に決めた。

当時の塾生諸君とは、けんけんがくがくの議論を重ねた。とりわけ、「学生は貧しいから参加費を無料にすべきかどうか」と、白熱の議論となった。結論は、たとえわずかであっても、「身銭を切る」ことがなければ、本当の学びはできないということに決した。その結果、『夢甲斐塾』とは縁を切ると、去っていった人達もいた。

私は、大阪から山梨に行き来する交通費と宿泊費の実費を塾生諸君が頭割りで負担してくれる以外の費用は要らないと辞退した。それでも、年度末になると、「今年は少し費用に余裕がありましたので」と心ばかりの指導料を工面していただいたこともある。県の事業だった時には思いもかけなかったことだ。自立の中から生まれた「志」の芽がうれしかった。

山梨に通い始めて、まず気づいたことは、塾生諸君があまりにも山梨のことを知らないことだ。例えば、「甲府駅前のお城の上にある塔は何ですか?」と質問しても、誰も答えられない。「さあ」とか、「ありますね」とか、「何でしょうね」といった声ばかり。私は翌朝早く、わざわざ確かめるために出かけた。そこには、かつて森林を伐採し過ぎて自然災害に苦しんだ日々を反省し、これからはしっかりと森林を守りますという誓いの文章が記してあった。私は思わず、「これこそ志だ」と感動した。

「知ることは愛することの第一歩。良さが分かれば好きになる」と、『夢甲斐塾』としての学びの柱を立てた。「山梨に生まれて良かった」、「山梨に住んで良かった」と思えるようになるためには、「山梨の良さが分かる」ことが基本だ。山梨県下の様々な場所に出かけて、みんな山梨の良さを知る学びにまず力を入れたのである。

そしてもう一つの学びの柱は、「実践」である。良さが分かれば、次に待ち構えている課題は、「良さをさらに新しく作ること」だ。『夢甲斐塾』の塾生諸君の手で、新しい山梨の良さを創造し、積み重ねていくことだ。それは今の時代に生きる人達の「歴史的な使命」とも言える。山梨をより良くするために、『志の実践』は、夢甲斐塾の学びの大きな柱となった。

さて、「出る杭を育てる」ことを目的として設立された『夢甲斐塾』での学びにおいて、私が一番重視したのは、〈志〉の学びである。

「出る杭」、即ち、横並び一線ではなく、突出した人を育てるに際して、何より問題は、その動機にある。端的に言えば、「出る杭」であれば、何でもいいとはいかないのだ。

根っこの動機において、「自分の利益のために」と思って「出る杭」をめざす人は願い下げである。自分が一儲けしたいため、自分が有名になりたいため、自分が選挙に出たいため、自分の人脈を広げたいためといった、自己都合の「出る杭」は、まことに迷惑な存在なのだ。そういう「出る杭」を、時には、「目立ちたがり」と世間の人達もまゆをひそめる。「世のため人のために」という〈志〉を大前提として、「出る杭」を育てるのが、『夢甲斐塾』の究極の目的だ。さらに言えば、「山梨の発展を通じて日本のため、世界のために実践する」「出る杭」を育てるのが目的」だ。

言葉を変えれば、『夢甲斐塾』に集う諸君は、〈志〉の学びを何よりも優先しなければならぬ。具体的には、「他人を思いやり、世のため人のためにお役立ちしたい」という並外れた心をはぐくむこと」こそが、『夢甲斐塾』

の学びの根本である。これから先、『夢甲斐塾』が存続する限りはその根本精神だけはみんな大切にしていきたい。

そして、その根本精神さえしっかりと確立できてきたら、そこに咲く花は百花繚乱、それぞれの持ち場において、一人一人の個性と持ち味に即した花でいい。二十年の節目に、今、山梨にたくさんの〈志の花〉が咲きつつあることを、私は大変うれしく思っている。この節目に、さらにたくさんの花が咲き競う日をみんな夢見ようではないか。

「日本人なら一度は住んでみたい山梨。豊かな自然と共に、そこにいる人達が実に伸びやかに、心優しく、個性的で、健康的な活動を多様に繰り広げている。これからの時代の未来の姿を予感させるすばらしい土地だ。このすばらしい山梨を支えているのが、政治や行政ではなく、『夢甲斐塾』の人達である」と言われる日を私は夢見ている。

十六年間、ほぼ毎月のように山梨に通った。その間、一度も疲れを感じたことはなかった。向かう時は「ワクワク感」、帰る時は「満たされ感」の連続だった。私にとって山梨は、「第二の故郷」である。かつてのように、山梨に足しげく通うことはなくなった。しかし、私の心は今なお、『夢甲斐塾』と共にある。一層の発展を祈る。